



蛍光灯、ネオン管の作品で知られる倉重光則だが、映像を用い、絵画を描くことは以前から行っている。ダンス、演劇、舞踏、音楽とのコラボレーションも行い、近年では自ら詩を朗読し、作品を見ながら聴くという体験を観客に促し、「不良実存」展(2017年10月8日-30日 | Emi スタジオ | 千葉県鴨川市江見東真門 342)においては、地面にスピーカを四つ埋め、音によって矩形を感じさせる作品を発表した。今回の作品も、これまでの探求の延長であろう。今回の展覧会のDM宛名面には「豊潤な時間 補助線」と記され、反対面には「Mellow Time 光と影」と記されている。メロウタイムと豊潤な時間は同じだから、補助線と

光と影という二つの副題がついている点も、考慮に入れる必要がある。奈義町現代美術館での倉重の個展を見て気づいたのは、倉重の作品とは矩形を見る者が補うのではなく、はじめから繋がることを前提にされていないのではないかとということである。つまり、倉重の作品が描くのは矩形ではない。全てが「補助」線であり、本線がない。それは光と影と同様、共に実体が存在しない。今回の展示はプラン作品を画廊内に展示しているのでインスタレーションではないのに、メインの《Mellow Time》はインスタレーションとなっている。《Mellow Time》の一つのパーツを写すと、上のように周りは闇に沈んでいくのである。

